第１回丹波篠山市総合教育会議　議事録

１．日　時

令和元年８月２日（金）　９時３０分～１１時２５分

２．場　所

市役所第２庁舎３階　２－３０１・３０２会議室

３．会議に出席した構成員

市　　長　　酒井　隆明

教育委員会

教 育 長　　前川　修哉

教育委員　　酒井　克典

教育委員　　中村　貴子

教育委員　　垣内　敬造

教育委員　　井上　友香

４．事務局出席者

部長　稲山　　悟

次長　酒井　　宏

教育総務課　課長　小林　康弘

学校教育課　課長　尾松　直樹

社会教育課　課長　柏戸　隆弘

こども未来課　課長　前中　　斉

地域ｺﾐｭﾆﾃｨ課　課長　谷掛　昭二

創造都市課　課長　竹見　聖司

総　務　課　課長　中筋　有香

社会福祉課　課長　三宅　芳樹

教育総務課　係長　田中　真紀子

教育総務課　主査　齋藤　恵美

５．次第及び協議・調整事項

別紙の通り

酒井市長	１　開会
酒井市長	２　報告・協議事項 (1)子育て支援について 　丹波篠山市としては、子育て支援に力を入れているところであるが、課題や問題について教育委員からご意見があればお話しいただきたい。 　また、教育委員会から、課題や問題について説明いただきたい。子育て支援担当の前中課長より何か説明はないか。
前中課長	味間地区については、他の地域で子どもの数が伸び悩んでいる中で、子どもが増えており、味間こども園も子どもが集中している状態である。今後、幼児教育の無償化のこともあり、入りきれなくなるのではという心配もある。 　また、児童クラブについても同様の傾向があり、特に味間児童クラブでは、長期休業期間中は既存の施設で入りきれないため、味間小学校の一部を借りて実施している。そのため、指導員の確保も必要になり、その確保が難しい状況がある。派遣依頼や職員による応援で対応しているが、現場職員の負担が増え、職員の定着が難しいのではないかと考える。
酒井委員	味間こども園での受け入れが厳しいのは、施設面、人的面のどちらか。
前中課長	両方である。
酒井委員	味間こども園は、味間地区の子どものみが利用しているのか。
前中課長	ほとんどの子どもが味間在住である。ただし、０～３歳児はどこの地域からでも来ることが出来る。
酒井委員	０～３歳児については、同等の施設が利便性の良いところにできれば、入りきれないという問題は解決するということか。
前中課長	そう考えられる。
井上委員	味間児童クラブは、味間幼稚園跡を利用している。部屋ごとに仕切られた教室を活用しているため、各部屋に指導員の配置をしなければならない。職員が増えないのであれば、隣の部屋との仕切りがない施設にするなど、指導員が少ない人数で見ることができる状況を作ることが大事ではないか。 　味間こども園を利用している４歳児、５歳児のうち、夕方までの保育をしている子どもがそれぞれ６０名以上いる。その子どもたちが、来年や再来年に小学１年生になったときに味間児童クラブの利用人数が増えると予測される。受け入れの対応策を検討すべき時期となってきていると感じる。
酒井市長	味間こども園、味間児童クラブで共に利用人数が増え、指導員も施設も課題が発生していることがよく理解できた。対応策等について検討していく必要がある。

垣内委員	出生率は下がっているが、こども園の利用率が増えている。それは、親の働き方に左右されているためであると思う。親の働く地域に適切なこども園があれば預けたいというのが親の思いである。施設や人的面を改善することはもちろん重要であるが、対症療法にすぎないと思う。
前川教育長	保育園通園対象の３歳までの子どもは居住地に関係なく園を選択できるので、就労支援として、多紀地区に勤めている方や京都方面へ通勤する方は、たきこども園を選択することができる。働くことと子育てを両立させていくための支援を考えていかなければならない。 子どもが幼児教育を受ける時期に働いていた家族にとっては、小学校へ行ったからと言って仕事をやめるわけではなく、その延長である。 味間児童クラブについては、人的面や施設の問題があるため、高学年まで利用することについて、安全面でどこまで整備できるかが大きな課題であると感じている。
中村委員	子育て支援について、子育て中の母親に対して、仕組みがわかりにくいと感じている。 例えば、就学前の幼稚園問題について、住んでいる地域で幼稚園の条件が違う。市内の幼稚園は、同じ条件で統一すべきである。 ０歳から連続した生涯学習により、子育て一番をわかりやすく、明確に示していただきたい。 そのためにも、教育委員会と福祉部局の連携が必要である。
前川教育長	篠山、たまみず、岡野幼稚園は短時間保育であり、ささやまこども園、富山こども園は長時間保育であることが分かりにくいということか。
中村委員	そうである。園によって保育時間が違うことである。
前川教育長	大山、西紀みなみ幼稚園は、幼稚園のあと預かり保育をにしき保育園で実施している。住んでいる地域によって違うということがある。 篠山地区については、短時間保育と長時間保育を最初に説明し、保護者に選んでいただいている状態である。 丹波篠山市全体で就学前教育をこども園に持っていこうという計画はあるが、具体的な計画ではなく構想の段階である。
酒井市長	ささやまこども園、富山こども園、篠山幼稚園、たまみず幼稚園、岡野幼稚園についてはあり方を検討していく。しかし、幼稚園側とこども園側で考え方に違いがあり、各自治会長の中でも意見が分かれている。そのため、一緒にすることは難しいことである。 現在、市内全域の就学前教育が同じ条件ではないが、こども園をつくる計画もすぐにはできない。既設の幼稚園等を統合して新設こども園をつくるとなると費用もかかる。 また、市民から地域で子育てをしたいという要望もあるため、統合となると地域の理解が必要である。ただし、住んでいる地域ごとに就学前教育を明確にすることは必要である。
酒井委員	統合となると様々な問題が出てくる。財政状況や、様々な状況について

	市民へ情報提供を行い、市民が選択できるようにするべきである。 　多紀地区は、地域一丸となって小学校の統合をした。そして、たきこども園ができた。働き手が無い、財政的な余裕がない状況であるため、集約を考える必要がある。そして、市民の声を聴きながら議論を行っていく必要がある。 　児童クラブの利用増加は、昔のように地域の人に見守られながら、子ども同士が群れて遊ぶ機会が減っていることも要因の一つと考えられる。そういった状況を改善することも重要であるが、現状課題を解決することは難しいので、児童クラブにボランティアを取り入れるなど、現場の職員に負担がかからないような方策を議論すべきではないかと思う。
酒井市長	既設の幼稚園等の統合に関しては、具体的な案を出してもらえたらと思う。 　地域の理解も無く統合することはできない。しかし、地域から統合の要望があれば検討する。
井上委員	市民が一致団結して声を上げた地域には対策をするということか。 　例えば、危険地区等に建っている施設の移転についても、市民の声が上がれば対応するということか。
酒井市長	危険ということであれば、市民の声が無くても対策をするべきである。 　今回は統合についてのことである。統合については、地域に大きくかかわることなので、勝手に決めることはできない。
酒井委員	今の丹波篠山市において、児童クラブやこども園で人的面の課題がある中で、各地域で同じことをすることは難しいのではないか。 　そのことについて、説明を行い、保護者がある程度判断しなければならないと思う。
酒井市長	具体的な説明をいただきたい。
酒井委員	具体的な内容の前に、児童クラブ、こども園の利用増加、人的面の課題を把握し、状況を共有した上で改革案を出していかなければならない。 　人的面の課題に焦点をあてるのであれば、その問題を整理した方がわかりやすいと考える。
酒井市長	人的面の課題は児童クラブ、こども園に限ったことではない。利用者の要望を満たすために、人員の確保、建物の有効利用を考えるしかないのではないか。 　現在は、子育ては社会で見るべきという考え方になってきている。家庭での育児の大切さを表さなければならないと思う。 　現在、夏休みに児童クラブへ通っている子どもは、本当に児童クラブが必要な子どものみか。
井上委員	そうである。高学年の中には一人で家にいることが出来るけれど児童クラブを選択している子どももいるが、低学年は迎えが遅いことから必要と思う。
酒井市長	近隣市町の児童クラブの利用率はどうか？

前川教育長	丹波篠山市ほど高くない。 味間地区は、児童クラブやこども園の利用者の保護者世代である３０代、４０代が多く住んでいる。それは、子育てより、働くということを重要視して考えたときに、交通の便等の利便性を追求してしまうためであると思う。そのような利便性を他の地区で考えることが出来れば分散するのではないか。 昔は祖父母が子どもを見ていた。今は誰が子どもを見るのか。一人で家に残していることで、不審者等、安全面に対しての不安が高まっている。また、親は子どもが友達と一緒であると安心できる。この状態を社会の問題として考えていかなければならない。 子育ての課題は地域ごとで異なる。働くことと子育ての両立について市民に関心を持ってもらい、次の世代を担う子育てに関わっていくことが重要である。
酒井市長	丹波篠山市の子育て支援については、ここ数年充実したものとなっている。問題は、市内高等学校への進学率の低下、出生率の低下、東部地域への若者の定着がまだまだであることである。
竹見課長	市内高等学校への進学率の低下は、三田方面への流出が課題である。 また、出生数は一昨年まで３００人台で推移していたが、昨年、今年と２００人台となっている。これは、団塊ジュニアと呼ばれる世代が、出産時期を終えているためではないかと考えられる。 人口について見てみると、味間地区は分譲地の開発が進んでいるため、人口が増加している。担当課と連携して課題把握に努めていきたい。
酒井委員	市長から、「教育委員会で子どもの育ちに合った児童クラブのあり方はどうか。丹波篠山らしさとなれば、もっと地域のことを考えていかなければならないのではないか。基本的なところを教育委員会でしっかり考えてほしい」との提案があってもいいと思う。 そして、市長と教育委員会で問題意識の共有ができた状態で、市長より「子育て一番の実践をしてほしい」と声があれば、教育委員会と担当課で連携を行い細かい内容について考えていけばよいと思う。
酒井市長	味間地区で一時的に子どもが増えていることについては、対処していかなければならない。 しかし、心配することは、市全体で出生数が落ちていること、若者の市外への流出である。人口が減っていく中で地域を維持していくことが課題である。地域を支えていく子どもがいるかどうかが課題である。ある程度の出生数を確保すること、故郷を担う教育を行うことが重要である。
前川教育長	故郷を担う教育をするために、スタッフをどうするかが問題である。待遇をどうするかなどの人材確保が課題である。関わる人の人手不足を現実問題として感じるところである。 また、地域の魅力をどのように発信していくか、仕組みづくりができないかと考えている。

	社会教育委員から「市民センターに若い母親が集まる場所を作ってもらえればよい」との声があった。子育て世代が求めているのは、繋がりを作ることである。子育てをする方が集う場所について、たきこども園で展開を考えている。 例えば、「おすそ分け文化」である。これは、近所の方が作った野菜を、迎えにきた親が持って帰るコーナーを作ることである。 今ある資源を活用し、工夫することで魅力づくりができないか。それが丹波篠山市ならではの仕組みづくりではないか。「おすそ分け文化」が、丹波篠山市の魅力になるのではないかと思っている。地域の方が手助けできるような仕組みを考えていかなければならない。
酒井市長	資料の「篠山市地区別年齢別（０～５歳）人口統計表」から、深刻なことは出生数が低下していることである。しかし、出生数を増加させることは難しい。 地域の活性化に対して、明るく前向きに取り組む地域には人が集まる。 東部地域に子育て世代が帰ってきて子育てしようと思ってもらうことが一番大切であると思う。
井上委員	「親子の絆づくりプログラム“赤ちゃんがきた！”」に参加された多紀地区の方が、農業をするために多紀地区に移住したと言われていた。近くにこども園が出来たため、将来的にも働きながら農業ができると喜ばれていた。多紀地区は、野菜作りなど自然を生かした活用を打ち出せば、伸びていく可能性がある。
酒井委員	村が元気になることは、一定の収入があることである。「農都」としての丹波篠山市が担当課にどこまで浸透しているか。また、各課の連携が十分出来ていないのではないかと考えている。
酒井市長	各課の連携が足りないという指摘は受け止めて、周知していく。
稲山部長	指摘された分は、農都創造部と連携していく。
酒井市長	市内全域の子育て政策が十分に浸透していないので、人口の流出、出生数の低下となっている。子育て支援を市内全域にわかってもらうように周知していきたいと考えている。
酒井市長	（２）教育大綱について 「篠山市教育大綱」は、対象とする期間が平成２７年度から平成３０年度となっており、今年度に新教育大綱を策定する必要がある。内容については、「篠山市教育大綱」を踏襲していきたいと考えているが、意見を聞かせていただきたい。
井上委員	３.学力の確立と向上の（1）読み、書き、計算、あのねちゃんのうち、あのねちゃんは、現在学校で取り組んでいないと思われるがこのまま残すのか。
尾松課長	学校現場では、教育大綱の趣旨を踏まえた取組となっており、記載された内容と離れている所もある。あのねちゃんについては、「問い」を通じ

	た対話や学び合いの一手法として、授業改善の柱に据えて取り組んでいる。誤解があるなら、文言については、見直していくことも必要である。
前川教育長	コミュニケーション能力を身に付けるための一つの手法として書かれている。学校は書くこと、話すことに力を入れているため、言葉を置き換えて残すことでよいのではないか。
井上委員	はい。そのようにお願いする。
酒井委員	文言のみではなく、根本的な見直しが必要ではないか。項目はこのままでもよいが作り直さなければならないと考える。 また、「子育て」についても重点的には「篠山市教育大綱」には含まれていない。
前川教育長	３−（１）については、新たな学習指導要領の趣旨に則り、学力の向上に向けて言葉を整理する。「一人も見捨てない」は大事にしたい言葉である。
酒井市長	学力向上について、「全国学力・学習状況調査」の成果はでてきているのか。
尾松課長	成果はでてきている。
酒井委員	平成２６年度に実施された「全国学力・学習状況調査」において、丹波篠山市は学力が低かった。そのため、「第２期篠山市教育振興基本計画（篠山きらめき教育プラン）」の中で、学力の向上に向けた取り組みを行った。 その成果と課題について、整理を行い、市長に説明をするとよいと思う。
酒井市長	３−（２）市内３高等学校との連携についてはどうか。
尾松課長	平成２９年度から、篠山市キャリア形成支援事業〜夢プラン〜を実施している。進路学習を始める市内中学２年生とその保護者を対象に、市内３高等学校の生徒が一般社団法人 BEET の協力を得て、プレゼンを通して自校の魅力を発信するもので、中学生にとって、進路選択の一助になればと考えている。 この事業の実施を、直接市内３高等学校への進学に結び付けて考えることは難しいが、それぞれの高校の魅力や特色を知るという意味では、生徒たちにストレートに伝わるため、大変良い取組であり、生徒や保護者、教員にも好評である。
中村委員	やりたい部活動が、市内３高等学校にないことが進学率の低下の原因と考える。
酒井委員	なぜ、市外の学校が選ばれるのか。市内の学校に対して、どのような期待を持ったのか。市外の学校が選ばれた理由は何かについて、考えていかなければならない。
酒井市長	学校の進路指導で、市内３高等学校を推奨することはできないか。
前川教育長	平成３０年１２月に実施した篠山市キャリア形成支援事業〜夢プラン〜は、中学生が不安になっている時期に、進路について深く考えるきっかけになっている。この事業を受けて、子どもたちの考え方が変わってきていると感じている。 進学希望、友人関係、部活動などの要因を市内３高等学校が、すべて満

	たす高等学校であるかどうかは別として、各高等学校の特色を出していく必要がある。
井上委員	以前の市内高等学校の説明会は、学校主催で近隣市町と合同の説明会だったため、目移りしてしまうことがあった。 昨年度から実施されている篠山市キャリア形成支援事業～夢プラン～では、市内３高校生が中学生へプレゼンを行うので子ども同士の伝わり方を感じた。高校生にとっても良い機会となっている。高校へのバックアップとして、良い事業が出来たと考えている。
前川教育長	中学２年生はちょうど進路を考える時期である。「トライやる・ウィーク」等で社会を経験しているため、良いタイミングである。
酒井市長	２.地域に開かれた学校（２）高齢者と共に学ぶについてはどうか。
谷掛課長	今年度も高齢者大学７学園全て、小学校との連携を計画している。子どもと高齢者が、同じことについて学ぶ「一般教養講座」と「グラウンドゴルフ」、「スポーツ吹き矢」などの「趣味講座」で交流を行っており、連携する学年等によって交流の仕方を変えている。 核家族化に伴い、子どもと高齢者が触れ合う機会が少なくなっているため、子どもが高齢者と会話することを嬉しいと感じており、双方にとって良い機会となっていると感じている。
酒井委員	これからの学力向上を含めて、高齢者とのコミュニケーション能力を身に付けることは、大事な要素となってくると思う。この取組は、丹波篠山市独自の取組であるため、充実と発展をしていただきたい。
酒井市長	４.スポーツに親しむについてはどうか。
柏戸課長	来年はオリンピックの年になる。「ＳＡＳＡＹＡＭＡ２０２０」を充実させることを含め、丹波篠山市でスポーツに親しむ機会を増やすよう進めていきたい。
酒井市長	教育大綱については、これまでのものを踏襲していく。しかし、変更、加筆があれば、それに基づいて教育大綱をまとめていきたい。 それでは、令和元年度第１回総合教育会議を終了とする。